

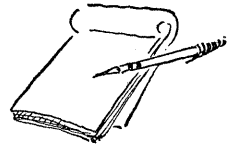
私の幼児教育論

一、幼児期をどう位置づけるか

私の専門は心理学である。しかし特に幼児を対象とするものではない。にもかかわらず、私は、大学で時に幼児心理学を講義させられたり、青年心理学までも講義させられたりもする。それで、時々自分自身、自分のほんとうの専門が何であったのか振り返ってみなければならぬことがある。

私の専門は、本来は、集団の中の対人関係であると思ってい

る。そして、私は、それを主に児童期の子どもたちについて研究してきた。それゆえ、時に私は自分自身を児童心理学が専門だと



田中裕次

思いたくなくともある。

いうまでもなく、児童心理学は、児童期にある子どもたちを対象とする心理学である。すくなくとも、「児童」という以上、いわゆる小学校に在学している年齢の子どもたちについての心理学でなければならぬはずである。このことは幼児心理学でも、青年心理学でも同じである。

しかし、こうした別け方が問題になるのは、幼児期とは、児童期とは、青年期とは、というように、それぞれの発達時期がいつからいつまでと定めようとする時である。もともと人間の成長の上でそうした発達区分があったわけではない。これらの区分は、人間の成長の姿を記述する上で、いろいろと都合がよいというこ

とで考えられたのかもしれないが、それにしても、幼児期と児童期の境目がどこにあるのか、児童期はいつ終るのかというような問題になると、なかなかむずかしいことになってしまふ。

発達段階の区分の問題はさておいたとして、では幼児を対象とさえしていれば幼児心理学といえるのであろうか。小学生を被験者とした研究をすれば、それだけで児童心理学なのであろうか。もしそうならば、心理学をまとも研究している者はすべて、発達段階のどこかに位置している人間を対象としているはずだから、そうした区分はあまり意味がなくなってしまうことになる。

人間の成長は本来連続的なものである。乳児期が終って幼児期がくる。幼児期の次には児童期が、といっても、毎日子どもと接している者にとっては、その区切りがいつなのかはわかるはずもない。まして子ども自身もそんなことを意識したりはしない。

私は幼児期にかぎらず、人間というものを、つねに成長の過程にあるものとしてとらえたいと思っている。それゆえ、私は発達段階のある区分に入る特定の者を対象とするのではなく、発達過程それ自体を研究対象とするということになるのである。私が、自分の専門を集団における対人関係においているのも、対人関係とか、集団というものが、白紙で生まれてきた赤ん坊が、人間と

して成長していく過程で、まさにその成長の本質にかかわっているからなのである。

ところで、こうした私の立場に立って幼児期というものを位置づけるならば、幼児期は単なる人間の成長過程の一時期であり、それは、ことさら特にとりあげて論ずる必要もなくなってしまうことなのである。

二、人間の成長過程で何がおきるか

よく、幼児期ほど重要な時期はないとか、幼児期の教育は特にむずかしいなどといわれる。しかし、人間の教育や成長過程で、むずかしくない時期はないし、重要でないというような時期があるはずもない。あるとすればそれは、いつもいつも神経を使い、緊張しつづけではくたびれてしまうので、すこし気を抜かせてほしいと思つて期待する、親や教師の心理的反映なのかもしれない。

人生は成長そのものであり、その裏には、それを支える躍動する命があるのである。三十歳代ともなれば、もはや青年心理学の対象からも、いやおうなく見放されてしまうが、かといって、発達心理学の対象にもなり得ないというわけではないはずである。

最近、壮年期・向老期・老年期というようなことばも盛んに使われるようになってきた。人生には、それぞれの時期にそれぞれの意味がある。青年期のある時、いかにも自分が大人になったような気がするときがある。しかし、結婚して子どもを育てるようになる時、はじめて、自分を育ててくれた親の苦勞がようやくわかるということにもなる。

また、四十歳もすぎても、中年ともなれば、そろそろ先の見えてきた自分の将来にあせりを感じたり、反対にひらきなおったりもする。これから成長していこうとする子どもたちを見て、「お父さんだって」と意気込んで見るものの「お父さんの苦勞はお前たちにわからないだろう」などとひがんでもみる。

向老期には向老期の体験があるだろうし、老年期には老年期の長い人生を歩んだ人にしかわからない実感というものはあるはずである。それを若い人たちに理解しろというのは所謂無理なことなのかもしれない。

しかし、ただ一つここで云えることは、そうした人生の節々でおこる体験も、それが、それなりの深い意味を持ちうるのは、それまでの歩みの積み重なりがあるからであるということである。そしてそれが、充実した歩みであればある程、その感慨もまたそれだけ深いものになるだろうと思えるのである。

三、親の生きがいと子どもの生きがい

私はかつて、この雑誌の第七十二巻第八号（昭和四十八年八月）に「子どもの生きがい」と題する小論を載せたことがある。そしてその中で、子どもの生きがいと親の生きがいは、同時に存在するはずのものだということを書いた。これは、子どもの生きがいは、はじめは、なんといいなくてもまず親によって与えられるものであるからで、親が子どもを生み育てることに一つの生きがいを感ずることができるとき、はじめて子どもも生きがいを感ずることができるようになるという意味であった。ここで「親」というのは、まさに子どもを育てる親のことであって一般の大人としての意味ではない。大人たちは、一人の人間としてそれなりの生きがいを持っていないければならないが、それが「親」という役割をも兼ねる時、そこに親としての生きがいも、また加わるわけである。

この「親」としての生きがいと、「一人の人間」としての生きがいは、本来一応別のものと考えることも敢えて必要なことであるのではなからうか。ともするとこの辺をいっしょにしてしまつて、親としての生きがいをそのまま人生の生きがいとしてしまつ

人々も多いようである。そういう人程、やがて子どもが成長して一人立ちしていくにしたがって厳しさを感じたり、あげくの果ては子どもに裏切られたといて嘆くはめに陥るのであろう。

一親である期間は人生のほんの一時期であるということが、最近の寿命の伸び率からわかった今、私たちは、よくよくこのことを肝に命じておかなければならない。しかし、このことは、逆にいえば、親子という間柄でいられる時期というものが、親と子に比べて大変貴重な時期であるということにもなる。そして、たかだか二十年に満たないその期間の中で、幼児期程、親と子が親密になれる期間もないということもまた認識されるのである。

子育てを人生の中で遭遇する一つの体験として位置づけ、それを積極的に受けとめるならば、そこに私たちは一つの貴重な人生のあり方を学ぶであろうし、自分の人生をそれだけ実り多いものにすることもできるはずであると思う。それはとりもなおさず、子どもを通して私たちが学ぶということであり、それこそ、子どもたちにとっても「生まれてきてよかった」と言わしめることになるのではなからうか。

四、幼児教育とは何か

幼児期というものが、長い人生の一時期にすぎず、また、その時期のみをとらえて云々するのでなく、人間の一生全体を見通して、その意義を考えなければならぬということを述べてきたわけであるが、ここでもう少し子どもの側に立ってこのことを考えてみよう。

いつだったか、NHKのルポ番組で、夏休みの学習塾に通う小学生たちのことが報道されたことがあった。その中で、「なぜ、夏休みも塾に行くの」という記者の質問に、ある子どもが「東大に入りたから」と答えているのがあった。「どうして東大に入りたいの」と続いて聞いた質問に、その子は「いい会社に入って、いい生活をするためには、いまのうちにガンバッテおかなければならないから」と答えていた。私はこれを見ていて本当にびっくりした。子どもを叱咤激励する親の姿もさることながら、子どもの子どもらしからぬ悟りにも驚いたのである。

将来のためにそなえて今をガマンすることは、確かに人間にとって時には必要なことではあろう。しかし、今という時をそのために犠牲にすることは、やはり問題ではなからうか。私はつねづねこのような教育を「今に見ている教育」と呼んでいる。人生のある時期に、その時しか感ずることのできない充実感というものを無視しては、将来の喜びはあり得ないのでなからうか。よし

んばもし喜びというものがあつたとしても、それは他人とは違
う独自の努力という点で、さぞ孤独なものとなつてしまふのでは
なからか。そこには、他人と喜びを分か合ふというそれこそ人間
的な本当の生きがいはいは生まれなし、ただ「俺は苦勞したのだけ
ら、他人より良い生活をして当然だ」という一人よがりな満足
感しか残らないであらう。

これと似たことは幼児の教育に当つてもよくあると思われる。
幸い幼児は、その記憶を大人になるまでとどめないし、親に依存
して生活しなければならぬという点で、所謂親の考えに従わざ
るを得ないから、一見問題になりにくい面があるのだが、それだ
けに親や教師は、充分注意してやらなければならぬということ
にもなる。

私的な話で恐縮であるが、私の子どもがまだ保育園に行つてい
た頃、盛んにテレビマンガの主題歌を歌つていたことがある。私
は、その時子どもというものは、ほんとうによく覚えるものだ
と感心したのであるが、考えてみると彼の記憶の源は、ただ「耳」
であるということにあらためて気がついてびっくりしたものであ
る。私は、つねづね「文字などというものは学校へ行けば教えて
もらえるのだから、無理に今教える必要はない」と、ごく常識的
に考えていたのであるが、他方、文字を教えてやつたら、きつと

もつと便利だらうなども考えていたのである。

しかし、よくよく考えてみると、文字を知らないということ
が、かえつて彼の耳をきたえているのであつて、やがて文字にた
よつてものを憶える時がきたとき、耳にたよることはそれ程必要
なくなつてしまふということにも気づいたのである。耳をつか
つて聞きとる能力を養ふという時期は、彼にとつて今が最後の
である。この時期を逸しては、彼はその全能力をそそいで耳を働か
せる機会はないのである。心理学を専攻し、ときに幼児教育に口
ばしをはさみ、「学校に入るまで、文字は教える必要はありませ
ん」などともつともらしく言つていた私は、この時やつとその本
当の意味がわかつて、われながら恥かしい気持ちを感ずるととも
に、あらためて、その言葉に自信を持つたのである。

人生には、その段階々々でどうしてもやつておかなければなら
ないことがあるのである。その時期を逸しては二度とそのチャン
スはおとすれない。そういう時期というものがあるのである。そ
ういう見方で幼児期というものをとらえるとき、あらためて幼児
にとつてそれは重要な時期であるということが言えるのである。

五、親と教師の責任

まだ本当の意味での自己主張というものを知らない幼い子どもたちにとって、親や教師が、彼らにいったい何を保障してやるべきかを知ることが大切である。

最近しきりに早教育の問題がとりあげられている。従来のレディネス（準備性）理論に対して、積極的な働きかけの理論がその根拠であるが、ともするとそれが背のび教育になってしまうこともしばしばのようにある。子どもは早くから刺激を与えて感覚をきたえてやれば、それだけ早く伸びるのだというわけで、いたずらに新しい刺激を与えて引き伸ばそうとするわけである。しかし、そうしたやり方がともすると、早く知識をつめこんですこしでも人より先んじさせようとする利己的な親の心と結びつくことは我々が最も警戒しなければならないことである。

たしかに子どもの感覚器官は、それを早く刺激してやることによって、より早くその機能を発揮するようになるであろうが、それだけまた早く卒業してしまうというものでもない。むしろ中途半端に卒業させてしまわないためにこそ早く開発して、それだけ長い期間充実した感覚能力を享受することこそがその主旨であるはずなのである。

幼い子どもたちが、あることがらに夢中になっているとき、それは必ず彼らが何らかの感覚器官をフルに発揮しているときであ

る。そして、それは彼らにとって最も充実した人生をすごしているときでもある。親や教師はそうした彼らの充実感を、さらに充実させてやる必要があるし、彼らが夢中になれるようなものをわが手で用意して与えてやらなければならないのである。

もちろん、われわれの社会には、それなりの秩序やルールもある。度を過ごして他人に迷惑をかけるようなことになることは良くないが、そういう失敗に至らないような場面や状況の設定や題材の選択こそ、幼児の教育指導に当る者の工夫のしどころといえないであらうか。

限られた時間と空間の中で、何かに没頭し、より密度の高い一時をすごすこと、それこそが人生の知恵というべきであろう。充実した親子の親密な関係、未熟でぎこちない仲間同士のつきあい。これらは、それがたとえほのぼのとした親しさにつつまれていようと、あるいは深刻な対立によるぶつかりあいであろうと、それが互いに真剣なものであるかぎり共感という心のつながりを生みだすきっかけになるものなのである。

幼い子どもたちの素直な真剣さを見るとき、私はいつも新鮮な感動にうたれるのである。そしてうらやましく思うのである。そして、あらためて、私は私の夢中になれるものを追求めようとするのである。

（信州大学）